

研究テーマ 当院回復期病棟における高齢脳卒中患者のALB値とFIM、CBAの関係性

病 院 名 医療法人社団健育会 石巻健育会病院

演 者 ^{ちばゆか} ○千葉有華(理学療法士) 高橋千賀(作業療法士) 小野寺泰弘(作業療法士)
津田佳代(理学療法士) 伊東貴広(理学療法士)

概 要

【研究背景】

葛谷¹⁾はフレイルや低栄養予防の対策が必要となるのは主に後期高齢者と報告し、前期高齢者においては栄養管理の個別対応が必要になるとも述べていることから、高齢者における栄養管理は重要である。一方先行研究では栄養と運動・認知機能の関係性の報告が数多くみられるが、栄養と高次脳機能の関係性を検討した報告は少ない。

【研究目的】

当院回復期病棟に入院している高齢脳卒中患者の栄養状態と年代別のFIM、CBAとの関係性を明らかにする。

【研究方法】

平成31年4月～令和2年9月までに当院回復期病棟を退院した脳卒中患者96名(男性50名、女性46名、年齢 78.8 ± 7.9 歳)を対象とした。経管栄養、転院や再入院、死亡退院の患者は除外とした。検討項目は診療録より後方視的にALB、入退院時FIM(運動・認知)、FIM利得、入退院時のCBA、入院時の年齢を抽出した。(1)対象者をALB3.5以上(正常ALB群)、3.5未満(低ALB群)に分類した。(2)対象者を前期高齢者、後期高齢者の2群に分類し、さらにそれぞれを正常ALB群、低ALB群の2群に分類し、各項目で群間に差があるのかを検証した。ALBに関してはゴンザレスらによって提唱されたCONUT法に基づき、 $ALB 3.5 \text{ g/dl}$ を基準とした。各検討項目の群間比較を行うためMann-WhitneyのU検定を用い、有意水準は5%とした。尚、本研究は当院倫理委員会の了承を得ている。

【結果】

入院時のALBは正常ALB群56名、低ALB群40名であり、41.6%が低ALB群に分類された。前期高齢者においては低ALB群9名、正常ALB群24名に分類された。後期高齢者では低ALB群31名、正常ALB群32名となった。後期高齢者では入院時退院時共に全項目で低ALB群の点数が有意に低値であった($P < 0.01$)。前期高齢者では、入院時は運動FIMのみ低ALB群の点数が有意に低値であり($P < 0.01$)、退院時には入院時と同様に運動FIMで有意差がみられ($P < 0.05$)、CBAでも低ALB群の点数が低値であった($P < 0.01$)。

【考察】

年齢に関わらず栄養状態と高次脳機能の改善が関係してくることが示唆された。低栄養の一般的な症状として集中力の低下や易怒性、覚醒の低下などが挙げられる。リハビリを実施していく中で正常ALB群では覚醒や注意が改善しやすく、一方で低ALB群では改善しにくい傾向にあり、それがFIM、CBAの差に繋がったのではないと思われる。年齢に関わらず栄養管理は必要不可欠であることが改めて示唆された。

【結論】

入院時からの栄養アセスメントは必須であるが、今後は退院までの経過の中で変化に合わせたアプローチが求められる。

【引用参考文献】

1) 葛谷雅文：高齢者における栄養管理上の問題。外科と代謝・栄養52巻1号。2018